特集

宗教系学部・学科の現在と意義

国公立大学にはない、私立大学ならではの宗教系学部・学科。その数は決して多くはないが、創立者と関係の深い宗教系の学部・学科を設置し、創立以来、ほぼ脈々とその流れは続いている。

本誌ではこれまで、芸術学部（第359号・2014年11月号）、看護学部（第364号・2015年9月号）、医学部（第369号・2016年7月号）といった、普段伝えられる機会が少ない学部を取り上げることで、各分野における大学の人材育成の意義、教育の現状や課題について紹介してきた。

本号では特集として取り上げるが、前述の各学部と同様の趣旨で私立大学の宗教系学部・学科の実情を把握する機会としていただきたい。

はじめに、日本人の宗教観や、われわれの生活と宗教との関わり、聖職者、神職、僧職といった職位の共通性／多様性などについても解説いただいた。

さらに新学部・学科の設立ラッシュが続く現在において、特に、他学部・

学科もある総合大学でありながら、宗教系学部を持つ大学に焦点を当てた。

その学部・学科に託す思いと教育の特徴や課題など、現在の姿をご紹介いただく。

ミッションスクールのミッション
内田 樹
●神戸女学院大学名誉教授

現代日本社会における生活と宗教
三宅 威仁
●同志社大学神学部教授

伝統と近代化の狭間で
角田 泰隆
●駒澤大学仏教学部教授

総合仏教の旗の下に
――大正大学仏教学部の取り組み――
林田 康順
●大正大学仏教学部長

僧侶養成から総合大学へ
――立正大学――
寺尾 英智
●立正大学仏教学部長、教授

開かれた神学教育を目指して
土井 健司
●関西学院大学神学部長

特集

宗教系学部・学科の現在と意義

ミッションスクールのミッション

内田 樹
神戸女学院大学名誉教授

私が5年前まで在職していた神戸女学院大学は、1875（明治8）年に二人の米国人女性宣教師によって設立された。この二人が日本伝道の仕事に応募した時、日本にはまだ「切支丹禁令」の高札が立っていた。禁教令が廃されたのは1873年のことである。この二人の宣教師が日本でその最初の教育活動を開始した時、日本には彼女らの提供する教育に対する「ニーズ」は存在しなかった。学校教育とは、まず「市場のニーズ」があって、しかる後にそれを満たすべく教員や校舎や教材を調えるという順番で行われると多くの人は信じている。しかし、教育史は、学校教育は教えることが自分の「使命（ミッション）」だと思い詰めた人の登場から始まるということを教えてくれる。学校の原風景とは、誰も来ない教室で一人ぽつんと「いつか訪れる生徒」を待ち続ける教師の孤独である。

しかし、全てを市場における商取引の比喩で考える現代人は、もう「教える者の孤独」という事況が理解できない。教師が「何を教えたいか」は、もう誰も問わない。文部科学省も保護者も、教師に「何を教えさせる」かについては詳細な要求を口にするが、教師が「何を教えたいか」には何の興味も示さない。

学生たちは「クライアント」であり、学校は「店舗」であり、教員は「売り手」である。どうすればクライアントに選好される商品を提供できるかに、学校の存否はかかっている、そう信じている人たちが、すでに私学経営者では過半に達している。だが、彼らは「禁教令」の布かれている国に学校を開学するというようなリスクは決して冒さないだろう。なにしろ「市場のニーズ」がないのである。市場原理に基づいて教育を考えるなら、当然そ

うなる。だから、もし明治初年にも今と同じように人々が「消費者と商品」のスキームで教育を語っていれば、日本の私学の多くはそもそも存在していなかったはずである。

ミッションスクールにとっての「使命」とは、自分たちが学舎を手作りし、教壇に立たなければ、自分たちに代わって教える仕事を果たす人が他にはいないだろうという孤独の自覚のことである。それは商取引と最も無縁の感懐である。ビジネスマン的教育者は「よそがやって成功した事例」を模倣するか、せいぜい「自分たちが早く手を付けないと、よそに出し抜かれる」プログラムの開発以上のことは考えない。それに対して、「使命」とは「余人を以ては代え難い仕事」のことである。

使命とは、「この仕事をしてくれる人はいませんか？」という「呼びかけ」があった時に、それに「はい」と返答するというかたちで可視化される。「呼びかけ」のことを英語では calling、あるいは vocation という。どちらも「天職」を意味する。自分が果たさなければならない「使命」は、常に「呼びかけ」に対する「応答」というかたちで開示される。「呼びかけ」に対して、何の作為もなく、気負いもなく、ただ「はい」と素直に手を挙げた者の前に「使命」は開示される。挙手できたのは「この呼びかけの宛て先は自分だ」ということが直感されたからである。

これは一神教信仰の始点と同じ構造である。アブラハムに来臨した「主」のメッセージは、雷鳴や雲の柱や燃える柴といった非言語的な形象をまとっていた。だから、アブラハムにはその明示的一意的な意味は分からなかった。けれども、それらの表象が「自分宛てのメッセージ」であることは分かった。だから、「主の指し示す場所」に向かって歩き始めたのである。それは具体的な地図上の場所ではなく、アブラハムにとって、「主からのメッセージが、よりはっきり聞き取れる場所」という以上の意味を持たなかった。その場所を求めて家郷を離れること、それが一神教の始点にある実存的なドラマである。

ミッションスクールの「使命」はこの「アブラハムのドラマ」、すなわち呼びかけられてあることの高揚と孤独を（限定された形においてではあるが）再演することである。建学者が聞き取った「呼びかけ」を「できるだけノイズのないかたちで、はっきりと聞き取れる場所」を目指すこと、これに尽くされる。そのつどの歴史的環境の中で、どうすれば「そこ」に近づけるかを全力で思量すること。それがミッションスクールのミッションである。

以上は原則論である。現実はそれほど簡単ではない。

けれども、ここを抑えておかないと話が先に進まない。編集部から託された論題は「日本人の宗教観について解説すること」と「宗教系学部・学科の存在意義、将来像などについて」の二点である。レベルの違う論件であるが、「日本人の宗教観」が分からないと「宗教系学部・学科」の先行きも見通せないというのはご指摘の通りである。

私見によれば（と言っても、ここに書いていることは全部私見なのだが）、日本人の宗教観の際立った特徴は「習合」という点に存する。日本列島はユーラシア大陸の東端にあり、数千年前から（もっと前からかも知れない）大陸・半島・太平洋から渡来した人々とその習俗を受け入れて、文字通り「雑種」を形成してきた。ある集団が異族・異文化と遭遇したときの選択肢は、それほど多くない。殺し合うか、主人と奴隷になるか、あるいは共存するか。列島の住民たちは「異族との共生と交配」という生存戦略を選択した。だから、現代日本人には出自の異なる三種類の集団のＤＮＡが検出される。

宗教でも同じことが起きた。ふつうは、敗者の信仰は追放、廃滅されるのだが、辺境では土俗信仰者たちに「逃げ場」がない。仕方なく、両方の顔を立てる「習合」という解が発明された。土俗の神々はあるいは仏教的ヒエラルキーの内部に位置付けられ、あるいはさまざまな寺社の本尊や祭神に祀られた。「神といい、仏といい、ただ水波の隔てにて」という神仏習合の考え方は、仏教渡来以来１３００年にわたって日本人の宗教性を規定してきた。

平均的日本人は初詣には神社に行き、クリスマスやハロウィーンを祝い、葬式して戒名をもらう。これは無神論ではない。日本人は「超越的なもの」を認めないのではない、それに単一の名を与えることをためらうのである。だから、神社仏閣にも、教会のパイプオルガンやステンドグラスにも、巨岩や巨木にも、「超越的なもの」の臨在を感じる。この霊的感受性は「無神論」的ではないし、「一神教的」でもない。日本人において、超越的なものは多様な霊的形象を経由して共生的に顕現するのである。それを私は「習合的」と呼びたいと思う。

これも、人を霊的成熟へ導く一つの正統的なプロセスだと私は思う。現に、仏教は、発祥の地であるインドでも、密教・禅宗を生んだ中国でも衰微して久しいが、辺境である日本に仏典仏像が保存され、教学が深化した。明治の日本で、神仏分離・廃仏毀釈という宗教的原理主義が猖獗を極めたことがあった。このときに多くの仏像・経典・仏具が破壊され、多くの寺宝が強奪され、売り払

われた。延暦寺日吉山王権現社では神官が仏像に矢を放ち、興福寺では五重塔が焼却されかけた。だが、廃仏運動の実相を知ることに、私たちはきわめて不熱心である（日本史の授業ではほとんど教えない）。だから、多くの人は寺社に対する穏やかな崇敬の念は古代から絶えることなく続いているという「お話」を今でも信じている。たしかに、現代日本に「仏教寺院なんか焼いてしまえばいい」というような矯激な廃仏論を語る人はまず見ることがないし、「神官たちは廃仏運動のときの破壊について反省すべきだ」いうような告発をする人もいない。神仏どちらの側にも、「『あれ』はなかったことにしよう」という暗黙の合意があるように見える。宗教について正否を厳しく論じることへの忌避を、私はそこに感じる。これもまた一つの宗教的態度と呼ぶべきだろう。

最後の論件になった。このような宗教的風土において、宗教系学部・学科は今後どのようにあるべきなのか。たしかに「市場のニーズ」はほとんどない。けれども、宗教系学部・学科はミッションスクールにとって「なぜこの学校が存在するのか」を社会に対して明らかにし、学校が進む方向を示す「灯台」であり、「羅針盤」である。そこで教えるもの、そこで学ぶものは、その学校が何のために存在するのかをパーソナルな仕方で体現する「ロールモデル」でなければならない。それがどうすれば可能になるのか、それは各自で考えてもらうしかない。

宗教系学部・学科を志望する学生は、たぶんこれ以上は減らないと思う。どんな社会も、徹底的に世俗化されることも徹底的に宗教化されることも、どちらもできない。現代は、過度に世俗的になったことの反動として再宗教化しつつある。これは、アメリカにおける福音派の勢いや欧米におけるイスラモフォビア、中近東での宗派対立を見れば明らかである。人々は、もう権力や財貨や情報「だけ」を求めているわけではない。何のためにそれを求めるのか、その理由を求め始めている。

英雄がいない時代は不幸だが、英雄が求められる時代はもっと不幸だという言葉がある。それにならって言えば、人々が宗教を顧みない時代は不幸だが、人々が宗教にすがりつく時代も同じように不幸である。だから、宗教が再び顧みられる時代が近づいていることを、私は特に喜ばしいことだと思っていない。けれども、必ずそういう時代になることは間違いがない。とりあえず、一人一人が霊的成熟を目指すこと、それは現代日本人にとって最も喫緊な課題の一つである。

特集

宗教系学部・学科の現在と意義

現代日本社会における生活と宗教

三宅 威仁●同志社大学神学部教授

私に与えられた課題は、「現在の日本における生活と宗教との関わり」や「聖職者、神職、僧職といった職位の共通性／多様性など」について執筆することである。現代日本社会における宗教の現状に関する常識的な雑感になってしまうかと思うが、ご寛恕をお願い申し上げる。

現代日本人の「無宗教」性

まず、個々人の宗教意識から話を始めたい。現代日本人の中で何らかの宗教を信仰していると表明する人々の割合は、統計数理研究所の「日本人の国民性調査」（第13次調査、２０１３年）によれば、28％である。逆にいえば、7割強の現代日本人が信仰を持たず、「無宗教」を自認していることになる。

では、これら「無宗教」の人々は宗教と全く無関係な生活を送っているのかというと、そうではなく、風俗習慣としての宗教行為は行っているのである。例えば、初詣に行く人々の割合は、石井研士を研究代表者とする「日本人の宗教意識・神観に関する世論調査」（２００８年）によれば、72・2％である。墓参については、81・1％もの人々が「行く」と回答している。また、「お守りやお札などを身に付けている人」の割合は30・2％、「家内安全、商売繁盛、入試合格などの祈祷をしに行く人」は28・8％といった結果が報告されている。

つまり、現代日本人の過半数が自称する「無宗教」とは、「どのような宗教団体にも自覚的に所属していない」や「何らかの宗教的信条（教義）への信仰を自覚的に抱いていない」といった意味であり、風俗習慣として受け継がれてきた宗教行為の実践まで否定するものではない。

阿満利麿（『日本人はなぜ無宗教なのか』、筑摩書房、1996年）は、こうした状況について、大多数の日本人が標榜する「無宗教」とは「創唱宗教」（特定の教祖が創設し、明確な教義や教団組織がある宗教）を信仰していないということであって、「自然宗教」（自然発生的に存在し始め、明確な教義や教団組織がない宗教）は実践していると述べた。

祖先崇拝としての仏教

日本社会に伝統的に根付いている宗教といえば仏教と神道であり、これらの宗教に対する現代日本人の関わり方も自然宗教に対するものである。仏教は明らかに創唱宗教であるが、一般の日本人にとっては祖先崇拝を司る機関となっている。それに応じて、俗人の側から見た僧職の意味合いも、当初の仏教から変わってしまった。

原始仏教や上座部仏教における僧侶は、輪廻転生から解脱して涅槃の境地に至るために八正道を実践する修行者である。日本に広まった仏教はほぼ大乗仏教であり、僧職の意味は宗派によっても異なるが、例えば浄土仏教、特に浄土宗や浄土真宗においては、阿弥陀仏による極楽浄土への済度に与ることを信じて易行道を実践する念仏者である。しかし、大多数の日本人には、僧侶は葬儀や法事などの葬送儀礼を司る祖先崇拝の執行者と見なされている。

日本人の間に根強い祖先崇拝であるが、近年、葬送儀礼は仏教様式によらずともよいと考え、散骨のような自然葬を希望する人々の割合が増加しているといわれている。

風俗習慣としての神道

次に、神道に対する現代日本人の関係であるが、第一に、初詣や諸種の祭りのような「年中行事」を通じて関わっている。一年を節目ごとに区切って、毎年同じ時季に同じ祭事を執り行うことにより、生活時間に周期的なリズムを刻んでパターン化する。

第二に、神道は初宮参りや七五三や成人式のような「通過儀礼」を提供している。誕生から死に至るまでの時間を段階ごとに区切って儀礼を執り行うことにより、人生を一定の筋書きに当てはめて規則性や方向性を作り出す。また、通過儀礼には、もともと長幼の序のような社会関係を教え込み、既存の社会構造を安定化させるといった役割もあったが、そうした働きは現在では縮小している

と思われる。

第三に、現代日本人は合格祈願や地鎮祭のような各種の祈願や厄払いなどの呪術的儀礼において神道と関わっている。

さて、ここでさらに、なぜこれほど科学が進んだ現代社会においても、人々は依然として行事や儀礼や祈願を通じて神仏と関わろうとするのかを考えてみたい。

宗教行為の此岸性

まず大前提として、マックス・ヴェーバーがいみじくも指摘した「宗教行為の根源的此岸性」について確認したい。私たち神学や宗教学の研究に携わる者が、宗教現象に対してすぐに「超越的世界」「究極的関心」「聖性顕現」といった大袈裟な概念を当てはめたがるのとは異なり、ヴェーバーは『宗教社会学』（創文社、1976年）の冒頭において、宗教的ないし呪術的に動機付けられた社会行為はもともと此岸的に遂行されてきたと言い切っている。要するに、宗教とは大抵の場合、いわゆる「現世利益」をもたらすものとして信仰・実践されてきたということだ。

岸本英夫（『宗教学』、大明堂、1961年）は、信仰体制を「請願態」「希求態」「諦住態」の3種に分類した。一口に信仰といっても浅いものから深いものまであり、「請願態」とは、人間が日常生活を営む上で遭遇する問題の解決を超自然的な力（神仏）に願い求めるような態度である。「希求態」とは、人間としての理想を追求し、自らの性質を清め高めるような生き方を意味する。「諦住態」とは、永遠の生命との関係において日常的な生死を把握する観点を持ち、あるがままの生死を超えると同時に受容するような深い信仰を指す。この分類を用いれば、宗教行為を行うほとんどの人は「請願態」のレベルに留まっているといえる。

いささか話がそれるが、人々が宗教行為を行うときに、たいていは現世利益を追い求めている――これは現在に限らず、世界観が宗教的表象で満ちあふれていた時代においてもそうだったのではないか。『新約聖書』の、特に福音書には、イエスが奇跡的な能力で病気を治したり悪霊を追放したりする物語が数多く記載されている。例えば、「ルカによる福音書」第17章11～19節に次のような記事がある。イエスがある村に入ると、重い皮膚病を患っている10人の人が出迎えて「憐れんでください」と言った。彼らは癒されたが、その中の一人だけが神を賛美し

ながらイエスの元に戻ってきた。イエスは「ほかの9人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻ってきた者はいないのか」と言った。

2000年前のパレスチナに住んでいた人々の世界観においては、「神」や「悪霊」といった宗教的表象が現在よりもリアリティーを持っていたことであろう。しかし、この物語からも明らかなように、10人の人間がいれば、9人にとっては神やイエスは治癒のための手段にしか過ぎなかったのであり、たった一人だけがその信仰を「諦住態」のレベルにまで深めたのである。

このように、過去も現在も大半の人々の宗教行為は此岸的な救済財、つまり「現世利益」を求めて行われると言っても過言ではない。現代社会におけるこのような宗教の存続について考察するとき、私は今でもブロニスラフ・K・マリノフスキー（『呪術・科学・宗教・神話』、人文書院、1997年）の理論が参考になると考えている。

呪術と科学の「分業」

マリノフスキーは、単純文化社会であれ高度文明社会であれ、どんな社会にも呪術と宗教と科学が同時に存在していると考えた。これらのうち、呪術と科学は具体的な目的を達成するための手段であるが、人間が理性的に制御できる生活領域に対処するのが科学である。しかし、どれほど合理的な知識や技術を駆使しようとも、そうした科学によってはコントロールできない領域――「偶然」や「運・不運」といった言葉でしか表現できない事柄――は残る。こうした領域に対処しないままに放置すれば、不安や怒りのような感情的な緊張状態が生じる。そこで、科学で制御できる領域を超えた事柄に対処して安心感を生み出すものが呪術だと、マリノフスキーは考えた。

こうした観点から見れば、なぜ数多くの受験生が未だに天満宮で合格を祈願するのかがよく分かる。彼（女）らは受験に対して合理的な知識と技術によって準備できる限りのことを行うが、試験当日に天候が悪かったり同室の受験生がカゼを引いていたりといった、「運が悪い」としか表現しようのない出来事が生じる可能性は付きまとう。こうした可能性を放置した場合に生じる不安を減ずるために、呪術的行為は行われるのである。

従って、神職は、神道的行事や儀礼への参加者の側から見れば、彼（女）らと神々との仲立ちをし、合理的知識や技術の欠損を埋めてフラストレーションを解消してくれる呪術的祭司としての役割を遂行していることになる。

なお、マリノフスキーは呪術と宗教を截然と区別しているが、ここでは祈願や厄払いのような神道的行為を、マリノフスキーのいう「宗教」ではなく「呪術」と見なし、その理論を当てはめた。NHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査（2005年）も、「《お守り・おふだ》《祈願》《おみくじ・占い》といった現世利益的な行動」は「四〇年前と比べておこなっている人が増加している。一方、《お祈り》《礼拝・布教》《聖書・経典》といった自己修養的行動は四〇年前よりも減少している」と記し、現代日本人の宗教行為が呪術的性格の強いものであることを示している（『現代日本人の意識構造［第八版］』、NHK出版、2015年、141―142ページ）。

神社・寺院の減少

さて、こうした神道や仏教ではあるが、急激な産業化や都市化によって農漁村部が縮小するに従い、従来の氏子制度や檀家制度の社会的基盤が失われ、それに加えて現在の少子高齢化が進むと、地域共同体の崩壊とともに、全国に8万1000以上ある神社と7万7000以上ある寺院の4割近くが2040年までに消滅すると考える研究者もいる（鵜飼秀徳『寺院消滅』、日経BP社、2015年）。つまり、宗教の盛衰も人口統計上の要因によって甚大な影響を受けるわけであり、神社や寺院が踏み止まることによって過疎化や少子高齢化の流れを押し止めるという逆方向への作用は見られないのが現状である。

新宗教

ここまで、「無宗教」を自称する人も風俗習慣として関わっている仏教や神道について述べてきたが、信仰を持っていることを自認する3割弱の人々に目を転じると、そのうちのかなりの人は、いわゆる「新宗教」を信仰しているものと思われる。日本では、幕末期以降に発生した宗教を全て「新宗教」と呼んでいる。その第1世代ともいうべき天理教や金光教は現在では制度化され、新しい信徒を獲得して教勢を伸ばすのではなく、世代間で受け継がれていく形で存続しているのであり、その点では伝統宗教と同様の形態になっている。1950～60年代に躍進した創価学会や世界救世教や立正佼成会は、日本社会が急激な産業化や都市化を進める中で、農漁村部から都市部に移住してきた人々の日常生活における適応問題、いわゆる「貧病争」を解決する機関として飛躍的に発展した。ところが、現在のような資本主義の停滞期に入る

と、かつてのような教勢の拡大は見込めず、新宗教教団内部でも急激な高齢化が進んでいるといわれている。

大学生と宗教

最後に、私の印象程度の話になるが、宗教系大学において日々、学生と接していて感じることを述べたい。

先ほど、宗教は現世利益を求めて信仰されることが多いと述べたが、宗教がこれまで果たしてきた大きな役割の一つは、やはり「神」や「仏」といった超越的観点から人生の全体を俯瞰して意義付けることであった。しかし、昨今、経験的に確認できる範囲を超越した世界、例えば「神の国」や「極楽浄土」といった象徴を用いて表現される世界について語り聞かせると、拒絶反応を示す学生が多い。その理由は、科学的世界観が広がったことや情報化によって多種多様な宗教的世界観や行動様式が相対化されたこともあるが、何よりも、オウム真理教をはじめとする反社会的な宗教団体が引き起こした事件を巡る、またISその他の過激派組織が行った残虐行為を巡るマスコミ報道の影響によるところが大きいと思われる。

ところが、自らの人生の道標としては宗教を拒絶する一方、社会現象を理解する際には宗教を安易に説明原理として用いる学生も多い。政治的・経済的・地理的・軍事的その他多くの要因が複雑に絡み合った地域紛争を、単に「宗教対立」として説明するといった具合に。

こうした状況にあって、宗教系大学の教職員が果たすべき役割も大きいと思われる。現代の若者も、これまでと同じように、人生を意味付けたり死すべき定めに直面したりしなければならない。そうした課題に対して、宗教的象徴体系は手掛かりとなる素材をふんだんに提供してくれることを知らせるべきである。また、例えばこれまで以上に諸種の格差が社会に広がった場合、不満を一挙に解消するための排他性や攻撃性を正当化する理論として宗教が用いられたり、あるいは逆に、そうした不満を鎮圧する側の根拠として宗教が用いられたりする事態（ヨーロッパ諸国において、経済格差に対する抗議の声が全てイスラームの仕業と誤解されるように）が生じないとも限らない。そうした危険性に警鐘を鳴らし、人間が正しく生きて正しく死ぬために築き上げてきた知恵である宗教的象徴体系の豊かさを伝えたいと思うものである。

特集

宗教系学部・学科の現在と意義

伝統と近代化の狭間で

角田 泰隆●駒澤大学仏教学部教授

1 設立の経緯

駒澤大学に仏教学部が設置されたのは、新制大学の認可を受けた1949（昭和24）年のことである。1925（大正14）年に単科大学へ昇格する時に設置された文学部仏教学科を、総合大学へ展開するに当たって発展充実させるものであった。以来、本学の教育の基本理念である「仏教の教義ならびに曹洞宗立宗の精神」（寄付行為第2条）を具現化する学部として機能している。

設立当初から禅学科と仏教学科の2学科が置かれたが、これは、淵源となる曹洞宗の学問所において行われていた「宗乗（曹洞宗学）」と「余乗（仏教学一般）」という学修形態を受け継ぎながら、さらに明治以降に国外から流入した哲学・歴史学・宗教学などの新たな学問の手法を導入し、曹洞宗の寺院子弟の教育という伝統的意義を保ちつつ、新たな禅学・仏教学の樹立を意図したものであったといえよう。

その意味で、二つの学科はそれぞれ孤立するものではなく、カリキュラムも共有しながら、禅学と仏教学を幅広く学ぶことのできるものとなっている。2014年度からは、入学時には学科を決定せず、3年次に自らの学習計画に基づいて禅学科と仏教学科を選択することができるようにした。

駒澤大学

仏教学部が設置された翌年の１９５０年には、社会の多様な要請に応えるため、短期大学仏教科も設置された。昼間部での設置から、他学部の２部の設置とともに夜間部に移行し、社会人や修行僧の受け皿として機能していたが、学部学科改組の波に押され、２００８年度をもって廃止されている。

現在の募集定員は、禅学科75名、仏教学科１０５名である。約半数が寺院出身ではない一般学生で、寺院の後継者養成に特化することなく、東洋思想や日本の文化を禅・仏教の視点から学ぶ場として機能していることも、仏教学部の特徴といえるであろう。

2　教育の特徴

本学では、全学共通科目として「仏教と人間」を開講している。これは、仏教に関する知識一般を教授するとともに、大学の設立の経緯や建学の理念について学ぶものであり、全学部・学科の必修科目としている。

また、この科目では、年1回坐禅実習が行われ、全学部の学生が「坐禅」を体験できるようにしている。それに加え、坐禅に興味のある学生のために、選択科目として全学共通科目の「坐禅」（半期2単位）が4コマ開講されている。学内の坐禅堂において実施するが、例年、施設収容定員の3倍を超える応募がある人気科目となっており、２０１８年度からさらに2コマ増設する予定である。また、仏教学部では、通年科目の「坐禅」の授業を2年次の必修科目として開講している。

坐禅実習

3　最近の学生の変化

過去10年間の仏教学部の志願者数の推移は次ページの通りで、増減はあるものの、ほぼ横ばいである。これは、２００８年から全学部統一入試、２０１４年から一般入試Ｓ方式（特定科目重視型）の導入をはじめ、各種入試の併願による合格機会の拡大、あるいは高校における仏教学部教員による模擬授業、さらには仏教や禅のグローバル化、文化・芸術の基盤としての宗教（仏教）への関心の高まりなども影響していると思われるが、少子化の波は確実に押し寄せてきており、安定的志願者数の維持

年度	志　願　者　数
2007	597（禅242 仏教355）
2008	563（禅250 仏教313）
2009	616（禅246 仏教370）
2010	643（禅218 仏教425）
2011	755（禅343 仏教412）
2012	906（禅306 仏教600）
2013	759（禅385 仏教374）
2014	642 ※この年から禅・仏教、統一入試となる
2015	637
2016	984

にはさらなる努力が必要だと考えている。

近年、学生の基礎学力の低下等によって、入学後に学業が振るわず進級できない、あるいは卒業できない学生の割合が増加傾向にある。これらの学生を支援するため、昨年度から、e-learningを活用し、学生と教員が出席や受講の情報を共通して把握し、修学相談へと連結してゆく取り組みを行っている。

4　現在の課題

仏教学部としての最大の課題は、高校教育から学部の専門教育への接続である。禅学、仏教学には、漢文読解の基礎知識が不可欠であるにもかかわらず、高等学校における漢文の授業時数は、決して多いとはいえない。さらに、倫理・哲学に関する授業も縮小傾向にある。これらは入試における科目の比重とも関連してくるが、仏教学部においては、この両者の基礎学力の確保が、入学後にまず対応すべき課題となっている。

すでに、倫理、現社の授業時間削減への対応策として、２００７年度から専門導入科目として「仏教学入門」を設置していたが、さらに近年の変化に対応すべく、２０１０年度から「仏教漢文入門」および「基礎ゼミ」を設置し、学生の知識の平準化と専門教育へのスムーズな移行を図っている。今後も学生の修得状況などを分析しながら、継続的な対応を模索してゆくことになろう。

また、他大学と共通の課題でもあるが、少子化の影響は無視できない。その対応として、現在は検討課題の域を出ていないが、大学開催の公開講座において好評を博している禅、仏教に関する生涯学習システムの構築や、禅の国際化に対応した留学生の誘致などが対策として挙げられるであろう。一方で、曹洞宗の宗侶養成という学部設置当初からの責務を継承し優秀な人材を育成できる態勢を維持していくのはもちろんのことである。

5　卒業後の進路

仏教学部生の約半分が寺院徒弟であり、卒業後は曹洞

宗の大本山である永平寺（福井県吉田郡永平寺町）や總持寺（横浜市）、あるいは地方僧堂に安居している。

その他の約半分の学生は、他学部同様、学校教員や一般企業に就職している。その業種は多様で、特に近年は海外において禅（Ｚｅｎ）に対する興味が高まってきていることもあり、就職先が日本の伝統工芸や芸能からＩＴ関係や外資企業まで、さらに多様化する傾向にあるといえる。

6　将来に向けて

現在、仏教学部には20名を超える専任教員が在籍し、仏教のあらゆる分野をカバーしている。また、仏教・禅関係の資料では国内有数の蔵書数を誇る図書館があり、加えて禅と文化に関わる資料を収蔵・展示する禅文化歴史博物館もある。仏教や禅を学ぶには十分な環境が整備されており、仏教や仏教学の発展のためにも、この世界に誇るべき環境を将来に保ち続ける必要があると思われる。

また、欧米社会における禅（Ｚｅｎ）に対する関心の高まりがつとに指摘されるところである。米国アップル社の共同設立者の一人であるスティーブ・ジョブズは、若くして曹洞宗の僧侶について仏教や禅を学び、その知識や実践が彼の成功に多くの影響を与えていたことはよく知られるところである。このように、禅・仏教の思考方法が宗教の枠組みを超えて世界的に影響を及ぼす例が見られるようになっている。今後、本学仏教学部は、そのような世界の趨勢に対し、日本のオリジナルな情報を発信する基地としての機能を担っていく責務があると自負しているところである。より社会に寄与できる大学、仏教学部を目指したい。

禅文化歴史博物館外観

禅文化歴史博物館内部

特集

宗教系学部・学科の現在と意義

総合仏教の旗の下に
――大正大学仏教学部の取り組み――

林田 康順●大正大学仏教学部長

1 学部・学科設立の経緯

大正大学は、天台宗・真言宗豊山派・真言宗智山派・浄土宗の四宗派によって設立された世界で唯一の総合仏教大学である。わが国において、近世まで檀林制度が各宗の僧侶養成を担っていたものの、近代を迎えると、その役割は学校制度へと移行し、1885年に天台宗大学、1887年に真言宗新義派大学林（後、豊山大学と改称）・宗教大学（浄土宗）、1914年に私立大学智山勧学院（後、智山専門学校と改称）がそれぞれ設立された。1925年、仏教連合大学創設の提唱を受け、天台宗大学・豊山大学・宗教大学の学生を仏教連合大学に編入し、1926（大正15）年、大学令による大正大学（文学部〈仏教学科等〉・予科・専門部）を設立し、僧侶養成のみならず、仏教の研究と教育の門戸を広く開くこととなった。ここに、世界で唯一の三宗派による総合仏教大学が創設されたのである。

後、1943年、智山専門学校を大正大学に合併し、1949年には、新学制による大正大学（仏教学部〈仏教学科等〉・文学部）が設立認可された。その後、1993年から2009年まで、人間学部に仏教学科が置かれていたが、2010年から、再び仏教学部仏教学科が開設され、現在では仏教学科内に仏教学コース・国際教養コース・宗学コースの3コースが置かれている。2016年、大正大学は創立90周年を迎えた。

2 仏教教育の特徴

宗教を基盤として設立された他大学と本学の大きく異

なる特徴は、前述した天台宗・真言宗豊山派・真言宗智山派・浄土宗の四宗派が協調して教育に当たっている点である。すなわち、一宗一派の信仰を大切にしつつ、1926年の創立時、本学が掲げた建学の理念である「智慧と慈悲の実践」は、今に至るまでなんら変わることなく続いている。現在、本学では、建学の理念を体現するため、次のような「4つの人となる」を教育ビジョンに据え、全学科のAP（アドミッション・ポリシー）・CP（カリキュラム・ポリシー）・DP（ディプロマ・ポリシー）に対応させて、建学の理念に基づく全人的教育を掲げ、実践に努めている。

① 慈悲―慈悲とは、全ての生きとし生けるものに対して慈しみの心を向け、他者の悲しみや苦しみを共有し、その解決に取り組むことである。すなわち、慈悲とは、他者を「生かす」ことであり、その実践には個々の「生きる力」（智慧）の養成が不可欠となる。

② 自灯明―自灯明とは、他者の安易な言葉に振り回されず、真実を拠り所として自らを確立することである。その真実を知るため、学び続け、考え続け、歩み続けることが、自灯明の実践に他ならない。

③ 中道―中道とは、相互に対立する極端なものの見方のいずれにも片寄らない生き方である。中道を実践するためには、正しい生き方を求める心を育て、道徳心や倫理観を養い、他者の信頼や期待に応える姿勢が必要となる。

④ 共生―共生とは、文字通り共に生きるということであり、全てのものが時々刻々と移り変わり、直接・間接に関わり合っているという仏教の縁起の思想を基調とする。大学という学びの場において、志を同じくする者が共に学び、あるいは、社会実践の場においてそれぞれの目標に向かって支え合う姿勢を失わないことが大切である。

以上の「4つの人となる」を背景として本学のカリキュラムは編成されているが、特に仏教学科は、本山研修（比叡山居士林・長谷寺・智積院・知恩院での宿泊研修）、古都研修（奈良・京都への寺社参拝など、古都探訪を中心とする宿泊研修）、座禅止観・写経・写仏・仏像修復、あるいは成道会の企画運営など、全学に向けて多彩な講座を設定している。

3　近年の学生の変化について

近年の学生の変化として、若干、気付いた点を挙げて

みたい。まず、教育面からは、他学部・他学科科目の受講はもとより、学科内においてもなるべく広範囲に科目を受講して教養を高め、知識を深めようという積極的な学習意欲のある学生が少なくなっていると感じられる。また、学生生活面からは、クラブやサークル活動、各種学生会への入部・入会が減少し、上下の人間関係の構築に苦手意識を持つ学生が増加しているようである。

とはいえ、以上の点は、学生全体にあてはまるものではなく、学生全般は、熱心に講義を受け、課題や試験にも真摯に取り組んでおり、仲間同士で切磋琢磨して高め合い、大いに充実した学生生活を送っているといえよう。

4　学部・学科の現在の課題と取り組み

少子化に伴い高校3年生人口の減少が一段と進む、いわゆる2018年問題は、本学の仏教学部仏教学科にとって、もっとも大きな、かつ、喫緊の課題である。すでに進行している少子化に伴う各種の課題克服のため、仏教学部仏教学科では、以下のような、入口としての入試対策、在学中の教育の質保証、さらに、出口としての就職対策など、さまざまな施策に取り組んでいる。

① 入試対策―学生確保に向け、仏教学コース・国際教養コース・宗学コース（設立四宗派と時宗）のコースごと、宗派ごとにパンフレットを作成し、オープンキャンパスなどの機会を通じて入学希望者やその保護者に手渡し、丁寧に説明している。特に宗学コースのパンフレットは、各宗派所属寺院に郵送するなど、学生募集の広報に努めている。

② 教育の質保証―教育の質保証の一環として、基礎科目における確認テストを定期的に実施し、学力格差の解消に取り組み、ひいては、学科全体の学力向上に努めている。なお学科共通科目の確認テストは、教員会で結果を報告し、意見交換を通じて課題の共有化を図り、より良い教育活動に反映するなど、横の連携にも努めている。

③ 就職対策―専任教員が担当ゼミ生全員の志望動向を把握した上で、就職部と密接に連携してゼミ生の100％就職を目指して取り組んでいる。そのため、教員会では、毎回、就職担当教員から各種就職情報の報告を受け、学生へのきめ細かい対応に努めている。

5　学部・学科の将来像

前章で述べた各種の取り組みをこれまで以上に推し進

めていくことはもちろんだが、特に学生募集の面において仏教学部仏教学科を取り巻く現状はまことに厳しいものがある。そのため、仏教学部仏教学科では、アクションプラン委員会を設置して、学科全体の不断の改革に取り組んでいる。以下、途中経過ではあるが、その一端を紹介しよう。

総論としては、世界で唯一の総合仏教大学としての本学の伝統を生かし、思想・歴史・文化・文学・美術・国際など、仏教（仏教学）の周辺分野を網羅したコースの編成とカリキュラムの確立を目指し、多くの高校生に向けて仏教の魅力を発信できる仏教学部仏教学科の創造に努めたい。

各論としては、次のようなDP・CP・APを着実に実施することによって、総論の速やかな実現を果たしたいと考えている。

まず、DPの骨子として、本学が掲げる中道・自灯明・慈悲・共生という「4つの人となる」という教育ビジョンを理解力・判断力・表現力・行動力の修得という4つの到達目標に結び付け、仏教界にとどまらず、現代社会に大きく羽ばたくことのできる人物を育てる。

次に、CPの構成として、前記の到達目標の実現手段を教養知・判断知・技法知・実践知の4つの知として位置付け、これらの総合的な獲得を実現するため、〈思想・歴史系〉〈文化・教養系〉〈美術系〉〈国際系〉〈アクティブラーニング系〉などの豊富な科目群を配し、学生の目的や興味に応じて、それぞれの知の育成に資するカリキュラムの編成を目指したい。

最後に、APの仏教学部仏教学科が求めている人物として、総合仏教の旗の下、本学の創立時から一貫して掲げ続けている建学の理念である「智慧と慈悲の実践」に共鳴する人物像を提示したい。

今後、学生へのアンケートや聞き取りを実施し、その詳細な分析を通じて、学部・学科の次なる飛躍につながるアクションプランの策定に結び付けたい。

終りに、大正大学90年の歴史と、その前身としての各大学、さらには、その数倍もの遙かな歴史を有する仏教教育の伝統を継承しているという重みを厳粛に受けとめて、将来の本学仏教学部仏教学科の着実な歩みを進めていきたい。合掌

特集

宗教系学部・学科の現在と意義

僧侶養成から総合大学へ

――立正大学――

寺尾 英智●立正大学仏教学部長、教授

1 旧制大学から新制大学仏教学部へ

立正大学は、1580（天正8）年に開創された日蓮宗の僧侶教育機関である飯高檀林（千葉県匝瑳市）を淵源とする。明治維新の時代変革の中で、政府により大教院が設立されると、檀林は廃止された。これに代わり、日蓮宗では、1872（明治5）年に設立された小教院（後に宗教院と改称）が僧侶の養成機関となる。立正大学では、この小教院開設をもって開校の時とする。

宗教院は日蓮宗大教院、さらに大檀林と改められ、1886（明治19）年には普通学科が設けられ、それまでの仏教学や日蓮宗の教義を中心とするカリキュラムに、英語、数学、物理などが加えられた。1904（明治37）年には、専門学校令による日蓮宗大学林（後に日蓮宗大学と改称）となる。1924（大正13）年に旧制大学に昇格し、立正大学と改称した。文学部に5学科（宗教学科・哲学科・史学科・文学科・社会学科）が置かれ、さらに予科と研究科を擁した。僧侶の教育は宗教学科が中心であったが、他の学科にも多くの僧侶が在籍していた。

1949（昭和24）年、新制大学への制度変革により、それまでの1学部5学科制から、宗教学科を継承する仏教学部（宗学科・仏教学科）と、他の4学科を継承する文学部5学科の2学部7学科制として新たなスタートを切った。その後、経済学部、経営学部、法学部が順次開設され、平成に入って社会福祉学部、地球環境科学部、心理学部が加わり、品川キャンパス（東京都品川区）と熊谷キャンパス（埼玉県熊谷市）の二つの校地に8学部、大学院7研究科の体制となっている。

2　仏教学部の教育――現状と今後の行方――

本学の建学の精神は、日蓮聖人が『立正安国論』に説かれた立正精神を根本に、『開目抄』に表明された三つの誓いの言葉に基づいて、「真実を求め至誠を捧げよう」「正義を尊び邪悪を除こう」「和平を願い人類に尽そう」と掲げられている。仏教学部は、この建学の精神の直接的な継承を標榜する。宗学科では、日蓮宗の教義・歴史などを主なカリキュラムとして日蓮宗僧侶の養成とともに、日本仏教の思想・歴史を幅広く学ぶ教育に取り組んでいる。仏教学科では、インドにはじまりアジアに広まった仏教全般、さらに芸術などの関連する諸文化を視野に据えた教育を目指している。

本学では、教職課程・博物館学芸員課程などを除き、一般教育科目・専門科目ともに各学部が開設主体である。そのような中で、仏教学部では、各学部に共通する一般教育科目において仏教学関係の科目を開講するほか、宗教関係専門科目の一部を文学部などに開放している。日蓮宗僧侶の資格を取得するための科目は全学に開放しており、仏教学部に限らず他学部の学生も受講できる。全学で必修科目としている一年次の導入科目では、仏教および本学の歴史に関する項目について、各学部の要請に基づいて仏教学部が講義を担当している。

僧侶を目指す学生には、旧制大学時代から、寺院で修行しながら通学することが選択肢の一つとして重要な位置を占めていた。その場合、昼間は修行や作務を行い、夜間が勉学の時間であった。しかし、夜間に通う学生が全体的に減少したことにより、２００７（平成19）年から、仏教学部においても夜間主コースと昼間主コースを統合して昼夜開講制の一コース制としたため、夜間のみに通学することはできなくなった。そのため、対象者は減少しているとはいえ、寺院で修行しながら通学するという旧来のスタイルも変化を余儀なくされている。

近年の傾向として、僧侶を目指す学生が、より一層宗学科に集中する傾向が見受けられる。また、寺院の後継者は、大学で仏教以外のさまざまな専攻を学んで卒業し、三年次編入によって仏教学部、特に宗学科に入学する学生の割合が漸増している。

人文学が逆風の中に置かれる一方、僧侶の養成にも現代社会におけるさまざまな問題に対するあり方が求められていて、建学の精神を継承することの重要性を、改めて自覚すべきときに来ている。

特集

宗教系学部・学科の現在と意義

開かれた神学教育を目指して

土井 健司●関西学院大学神学部長

はじめに

関西学院大学神学部は、１８８９（明治22）年９月に米国南メソジスト監督教会のＷ・Ｒ・ランバス宣教師によって、関西学院の創立とともに創設され、今年で１２７年目を迎える。メソジスト教会の牧師を養成する神学校として出発し、初代神学部長は、同じく米国南メソジスト監督教会のＪ・Ｃ・Ｃ・ニュートン宣教師であった。校地は「原田の森」、現在の神戸市灘区の王子動物園付近にあり、西宮市に移転するのは１９２９（昭和４）年である。第一期生の鵜崎庚午郎は日本メソジスト教会の第三代監督、また釘宮辰生は第五代監督となっている。

なお、メソジストとは18世紀イギリスの聖公会のジョン・ウェスレーに遡る教派であって、「世界こそわが教区」と述べたウェスレーや、その薫陶を受けた牧師たちが世界に向けて福音伝道を推進した。太平洋戦争のおり、ひととき閉鎖されたが、戦争が終わるとカナダ・メソジスト教会のＨ・Ｗ・アウターブリッジ宣教師が来日して神学部再建に着手し、１９５２年には新制大学の一学部として新しく出発することができ

神学部校舎

た。以来、今日に至るまで、関西学院大学の神学部として研究・教育に励んでいる。

現在、日本基督教団の認可神学校として、教会担任教師（牧師）を毎年教会に送り出している。なお、専任教員も大半は日本基督教団の教師である。

1　神学部の教育課程

神学という学問は、「知解を求める信」という古代キリスト教の伝統にさかのぼる。その意味で、神学は根本においてイエス・キリストの福音宣教、それゆえ教会へと方向づけられているが、その関係は決して単純なものではない。学問としての神学は、素朴に信仰を表明するだけではすまないからである。旧新約聖書の研究、キリスト教史の研究、教義・教理の体系化、礼拝などの儀礼の実践方法など、諸分野にわたって神学は営まれる。歴史学、社会科学、文芸批評などの方法論を用いて実証的・理論的な研究が深められ、教育にフィードバックされる。本学部の教育課程も、基本的にこれら聖書学、歴史神学、組織神学、実践神学の四つの分野を柱として構築しており、ディプロマポリシーをはじめ、カリキュラムポリシーやアドミッションポリシーを作成するにいたっている。また全学的には、本学独自の「副専攻プログラム」（MS：Multidisciplinary Studies）の一つを学部として提供し、ジョイント・ディグリーにつなげている。さらに専任教員は他学部のキリスト教関連科目を担当するなど、本学のキリスト教主義教育の一翼を担っている。

2　コース制の導入

２００４年度から、神学部は、20名から30名への入学定員増と併せてコース制を導入した。教会担任教師やミッション系学校の宗教科教員などの養成を目的とする「キリスト教伝道者コース」（当初は「キリスト教神学・伝道者コース」）と、広くキリスト教の思想、文化に興味をも

2016年度始業礼拝

つ者の教育を目的とする「キリスト教思想・文化コース」の二つの履修コースを設けている。前者についてはバプテスマ（洗礼）を出願条件とし、後者についてはこの条件を外して学生募集を行っている。このため、一般入試などを通して、まったくキリスト教に触れたことのない学生が入学するケースもみられる。

同窓牧師から「教会に行ったことのない神学生が、神学部にいるのですか」と尋ねられることがあるが、「はい」と答えざるを得ない。ただしポジティブにそう答える。というのも、面白いのは、そのような学生がキリスト教に興味をもち、神学的に考える力を自ら涵養していくからである。さらに、教会に通い、牧師となることを志望するにいたる学生さえみられる。

必修科目の違いはあるものの、これら二つのコースの学生はクラス等を分けることなく教育を受けることが特徴であって、互いに刺激しあう関係にある。例えば、ときに教会では常識と思われていることが世間では非常識であることを発見したり、また書物からだけ学ぶのではなく、生きた本物のキリスト教を学ぶ機会となっている。「牧会学概論」や「説教学概論」、「賛美歌学」といった実践系の科目は、牧師志望でなければとうてい履修しないと思われるのだが、両コースの学生が普通に履修している。ただし、キリスト教伝道者コースの学生は大学院に進み、教会の担任教師になる者や宗教科の教員になる者が多いが、キリスト教思想・文化コースの学生は一般就職する者が多い。

3　ディアコニア・プログラム

２０１６年度から、創設１２５年を記念して構築した「ディアコニア・プログラム」が本格的に始動し、キリスト教系福祉施設における働き手を育成する教育も開始している。他学部生を含めて5名の学生が、このプログラムに登録している。「ディアコニア」は奉仕を意味するギリシア語であるが、キリスト教福祉に特徴的な概念である。「福祉の専門家はいても、施設のミッションであるキリスト教に理解のある働き手がいない」という現場の声を踏まえて、このプログラムをつくったのであり、「キリスト教霊性論」や「ディアコニア・ワークショップ」といった科目を中心としている。来年度には最初のプログラム修了者が卒業する予定となっている。

4　宗教間対話

２０１５年度に京都のＮＣＣ宗教研究所と協定を結び、英語授業 Theology in Dialogue を科目提供している。ＮＣＣ宗教研究所には毎年ドイツの大学の神学部から学生が送られてきて、日本の諸宗教を学ぶＩＳＪＰ（Interreligious Studies in Japan Program）に参加している。このＩＳＪＰの一つの科目を神学部開講科目として担っている。今年度も2名の学生がドイツから来学し、神学部の学生2名と他学部の受講者を含む合計5名が学んでいる。この授業は、キリスト教の視点からなされる宗教間対話を目的としたものである。キリスト教の伝統の強いドイツ社会でも、近年はキリスト教一色というわけにはいかず、社会の中でイスラムなど他宗教との対話を真剣に行う必要があるという。そのために、牧師になろうとするドイツ人学生が来日して日本の諸宗教を学ぶのであり、国際的に見ても宗教間対話はますます重要となるであろう。

Theology in Dialogue の授業風景

5　日本における神学教育

「多様性」という語は、戦後の神学部の歩みを象徴する言葉である。実は、戦後になって神学部が再建されたとき、最初の学生2名のうち1名は高野山の僧侶であったときく。その時の事情はつまびらかではないが、しかし何かしらシンボリックなものを感じる。本学神学部の伝統は、単純に一教派の牧師志望の学生だけを教育するのではなく、さまざまな背景を持つ学生を教育しつつ、開かれた方法で伝道者育成という創設時からのミッションを果たしてきたことである。毎年、平均すると約6名の教会担任教師が教会に赴任している。

古来、日本には神社や寺院の並び立つ風土がある。筆者は京都の伏見に育ち、幼少期から神社やお寺に親しむところがあった。日本の神学もこのような風土のなかで展開していくはずのものであって、他宗教との対話を大切にしつつ、開かれた仕方でこれからも神学教育を行っていきたい。